

# NEWSLETTER

James Joyce Society of Japan, April 2021



## Topics

1. 第33回オンライン研究大会のご案内
2. 研究発表要旨
3. シンポジウム I 要旨
4. シンポジウム II 要旨
5. 第33回研究大会日程とプログラム
6. 日本学会議会員任命拒否事件
7. 会費のお振込みについて

## 事務局連絡先

〒448-8542

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局  
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1  
愛知教育大学 外国語教育講座  
道木一弘研究室内

連絡先: [joyceanjapan@gmail.com](mailto:joyceanjapan@gmail.com)

協会ホームページ: <https://www.joyce-society-japan.com>



(コロナ禍のため営業を停止しているDavy Byrne'sの店頭に掲げられた壁画)

## 1. 第33回オンライン研究大会のご案内

2021年6月12日(土)、第33回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会は、愛知教育大学にて開催される予定でしたが、今年もコロナウイルス感染状況が見通せないことに鑑み、対面での大会を中止し、昨年同様にオンラインでの開催を決定致しました。オンラインでの開催が二年連続となりますが、移動の時間を考えずに参加できることや、資料等の見易さの点でオンラインの利点も少なくありません。ご理解の程何卒宜しく申し上げます。

プログラムとしては、研究発表1つ、シンポジウム2つを予定しております。シンポジウムのテーマは昨年予定していた今年に延期された内容と同じですが、パネリストには若干の変更がありますので、以下にご確認下さい。

---

## 2. 研究発表要旨

---

ジョイスと〈鞭打つ者〉—*A Portrait of the Artist as a Young Man*における痛みの詩学

南谷奉良

*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) の主人公Stephen Dedalusは、とある誤解から、イエズス会系の寄宿学校Clongowes Wood Collegeの神父に「パンディバット」でその手を打擲される。現在『肖像』を語る上で最も有名なエピソードの一つだが、この出来事に特に強い批評的関心が向けられるようになったのは、ジョイス自身の鞭打ち体験がRichard Ellmannの伝記の改訂版(1982)で記述され、さらに同年にBruce Bradleyが*James Joyce's Schooldays* (1982)で“Punishment Book”を発見して以降のことであろう。Collen Lamos (1995) や Katherine Mullin (2003) のような文化史的探求はすでに試みられているが、どちらかといえば、鞭打ちと性的快楽との繋がりに関心が寄せられ、本発表が主題として扱う「痛み」への関心は希薄であった。本発表では人文学分野で興隆を見せている痛み論の関心とアプローチにもとづき、言語化や他者との共有が困難とされる「痛み」の経験が一規律化されてきた暴力の文化を背景としながら一物語のなかでどのように言葉にされ、どのように読者に共有されていくかを*A Portrait*を中心に分析する。〈鞭打つ者〉(flagellant)のアクターは*Dubliners* (1914)にも*Ulysses* (1922)にも登場するが、*A Portrait*は他者の痛みには一切関心をもたず、主観的な痛みにもフォーカスにし、かつその言語化を試みている点で、貴重な中期的作品だと言える。

本発表の前半では、まず主人公が感じる鞭打ちの痛みと描き出された痛みを、2020年に41年ぶりに更新された国際疼痛学会(IASP)による「痛み」の定義に従って分析し、その定義からこぼれ落ちる側面として、単一の皮膚感覚としてではなく、おねしょや学校のベッドシーツ、暖炉の炎、蛇口のコック、クリケットのバットの音、劫火の説教に関連して描かれる温覚や冷覚、聴覚と結びついた連合的な経験であることを指摘し、さらに、その痛みが、点的な時間を感じられる単発的なものではなく、スティーヴンと語り手、読者によって相補的に、段階的に〈言語のなかで〉つくられていく感覚的経験であることを例証する。発表の後半部では、*Experiences of Flagellation* (1885)のような著作やHenry Stephens Saltの*The Flogging Craze* (1923)などに触れながら20世紀転換期に展開された反鞭打ち運動(anti-flogging movement)を紹介するとともに、ジョイス以外の人物が描いた鞭打ち描写を瞥見する。近年ではGabriel Hankinsの“Kafka's Whipper and Joyce's Pandybat: Reading Scenes of Discipline with Latour” (2020)のように、鞭打ちという規律的な暴力を比較分析する試みも見られる。本発表をそうした比較研究に合流させるためにも、特にジョイス研究史において長らく批評的注意を免れてきた、George Orwellが1911年頃に聖シプリアン校でおねしょをして受けた鞭打ち経験の描写との比較を行うことで、*A Portrait*の描写の特性を明らかにしてみたい。

---

### 3. シンポジウム I 要旨 ジョイスと音響メディア

---

横内一雄（兼司会）、永嶋友、今関裕太

ジョイスの生きた世紀転換期から20世紀前半にかけては、各種音響メディアの開発・普及により、人類の聴覚文化が大きく変容した時代であった。考えてみれば、筆者（横内）の生きた50年足らずの間にも、レコードとラジカセ、ラジオ番組のエアチェック（聞き逃すともう聞けない）の時代から、ウォークマンやCD、性能の良いコンポや予約録音機器を経て、今やウェブ上のさまざまなサービスを通して無限の音源にいつでもアクセスできる（けれど以前ほどリアルな音の再現にはこだわりを持っているように見えない）時代へと変化した。だが、それが文芸創作にどのような変化をもたらしたかといえば、即座に答えるのは難しい。100年前を振り返ってみて、現代まで連綿と受け継がれていくことになる当時のメディア革命は、ジョイスの文芸創作にどのような影を落としただろうか。そもそも新しいメディアの出現は文体に影響を与えるものなのだろうか。ロンドンやダブリンでメディア研究の洗礼も受けてきた若き文学研究者の二氏を講師に迎え、新興メディア時代のジョイス文学を評価するための手がかりを探してみたい。Zoom形式での実施を余儀なくされたとはいえ、これまた今の時代を象徴する同時双方向型通信メディアの特性を生かし、できれば参加者とのディスカッションの時間も取っていきたい。

#### 『ユリシーズ』と音響メディア・序説

横内一雄

このあとの二氏の考察が『フィネガンズ・ウェイク』を中心とするため、始めに横内が『ユリシーズ』に焦点を当て、同作における音響メディアの存在／偏在に注意を喚起しておきたい。この主題では Jacques Derrida の *Ulysse gramophone* (1987) の議論が目を引きだが、そこで論じられた第7挿話における電話使用だけが特権的であるわけではない。ピアノラ、蓄音機、ラジオ、さらには新興メディア以前の音響芸術や（逆説的だが）音のない映画など、多様な音響再生装置を大きなコンテクストとして提示した上で、それらの影響が古代以来の「文学＝書字文化」に染み出てくる瞬間をいくつか目撃したい。

#### ジョイスとラジオ——リスナーの感覚・心理・参加を中心に

永嶋友

はじめに、ジョイスと同時代のワイヤレス通信研究、ラジオ放送、ラジオ劇、ラジオ・リスナー調査、ラジオ・リスナー心理研究などを概観する。そして、これらの観点からジョイスのテキストを考察したい。ラジオは『フィネガンズ・ウェイク』における重要な象徴の1つである。同作品の第2部第3章では、HCEのパブのラジオからノルウェイ人船長と仕立屋の話やバットとタフのスケッチ・コメディなどが流れてきており、また第3部第3章では、ショーンと4人の登場人物がブロードキャスターとリスナーの関係性を暗示している。ラジオ放送の制作側、ラジオ放送内容だけでな

く、リスナーの感覚・心理・参加等にも着目し、(テキストに暗示されている) ジョイスのラジオ・リスナーに関する見解、それが同時代のラジオ・リスナー研究とどのような関係にあるのか、などを示していきたい。また、これらの議論を踏まえた上で、『ユリシーズ』におけるワイヤレス通信に関する描写に立ち戻り、少々考察を加えてみたい。

### 声の欠片と音の波——ジョイス作品における音声の技術と技法

今関裕太

パブの亭主が語る「ノルウェー人船長の物語」とラジオが届けるニュースや天気予報が交互に提示される第2部第3章は、『フィネガンズ・ウェイク』の中でも最も多声的な部分のひとつと言える。これまでに複数の研究者たちがこの章に着目しながら、ラジオの特徴として多声性(ポリフォニー)や耳障りさ(カコフォニー)、多言語混交(ポリグロシヤ)や異言語混交(ヘテログロシヤ)を挙げたうえでこのメディアと『ウェイク』の文体の類似性を指摘し、前者が後者に少なからぬ影響を与えたと主張してきた。しかし、特定のメディア技術の特徴がそれほど単純にテキストに反映されると考えてもよいだろうか。例えば、種々の音楽や言葉が相互浸透的に響きわたる「セイレン」のテキストの音声的複雑さは、種々の楽器の音響的特徴が擬音表現や韻律表現といった形で反映されていることによるのみ生じているのではなく、それらが登場人物の内的独白やその断片化をはじめとする諸技法と組み合わせられることで成立していると考えられる。こうした、道具やメディアの技術的特徴と言葉の技法の関係を念頭に置いて『ウェイク』の第2部第3章を読み直してみると、ラジオ放送の部分では物理的なノイズを表現する擬音語と電波の混線を模した声の混ざり合い、そしてそれらを媒介に生じる掛詞が意味生成上の複雑さの主要因となっている一方で、「ノルウェー人船長の物語」においてはそうした類似記号的(アイコンニック)な技法が、チャールズ叔父さん原理を作用させる自由間接話法という指標記号的(インデクシカル)な技法と組み合わせられることで、別種の意味生成上の複雑さが生じていることが見えてくるかもしれない。

---

#### 4. シンポジウムII 要旨『フィネガンズ・ウェイク』ワークショップ: アナ・リヴィアの独白を読む(61921-628)

---

山田久美子(司会) 宮原駿、下川理英、奥田良二

『フィネガンズ・ウェイク』最後の9頁余は、朝の居酒屋で目覚める主人公HCEの妻、アナ・リヴィアの独白と呼ばれる部分で、冒頭「川流れ」へと続く円環を構成する美しい文である。夫を擁護するアナの手紙が終わり、誰にともなく人生を回想する場面で、ウィックロウで湧いた泉がリフィ川となり、ダブリン湾に流れ込んで姿を消すまでが語られる。「柔らかい朝、街! ルスポ! わたしは葉を茂らせて喋っている。ルフプ!」と始まり、「そっと、私を覚えていて! あなたが千歳になるまで。リップ。への鍵。与えられた! 道孤独な最後の愛された長いあの」と終わる。近年、James Joyce Digital Archives等オンライン資料の充実により、生成過程や研究書を含め手の届くようになった『ウェイク』であるが、このワークショップを機により身近になれば幸いである。

(文責 山田)

## 『フィネガンズ・ウェイク』における「汚い流れ」に見る夢見人の人生観

——主人公の罪と、尿、川、言葉の連関——

宮原駿

ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』において「汚い流れ」は尿、川、言葉の流れなど様々なイメージの包括的表象である。汚い流れには、『ウェイク』という物語を夢見る主体、「夢見人」の人生における過ちという大きな主題が潜んでいる。本発表の主眼は、汚い流れの分析を通して、夢見人が目覚めた意識では到底向き合うことができない人生の過ちを受け入れようとする態度を探求することにある。彼の見る夢の中では、尿や川、言葉という汚い流れは、一方で、支配的な秩序を脅かす力を持ち、特に主人公 HCEの罪とのつながりをもつ。例えば、謎の女 Fanny Urinia (171.28) の挿話では、彼女の場合場違いな排尿は酒場の文化秩序を攪乱する。また、排尿する乙女たちの挿話において彼女たちの排尿行為が HCE を猥褻行為へと掻き立てる。しかし、他方では、罪の主題と結びついた汚い流れは再生へと導く力を秘めており、それは特に第四部の ALP の独白において HCE の罪の受容とやり直しの希望につながっていく。第一部第八章に登場する洗濯女たち Mrs Quickenough と Miss Doddpebble は ALP が体現する Liffey 川の汚い水にまみれていくうちに楡と石という新たな存在として再生することになる。そして、川の流れが言葉の流れと一体化する ALP の独白において、彼女は夫 HCE の謎めいた罪を許し、その人生を受け入れることで未来への希望を携えてダブリン湾に流れ込む。『ウェイク』という夢の物語をメタ的に解釈すれば、こうした汚い流れにおいて緩やかに結びつくいくつかのイメージと HCE の罪との結びつきが、夢見人自身の罪意識をその源泉としていると仮定できる。「汚い流れ＝人生の過ち」という主題は、彼の夢の意識において、人生における過ちに苦しみながらも、目を背けず、可能性を探り、最終的に人生をそのネガティブな面も含めてまるごと認めようとする受容的な態度へと通じているのではないだろうか。

## sonhusband と daughterwife: ALPの独白に見る東洋思想

下川理英

本発表では、『フィネガンズ・ウェイク』最終章のALPの独白に見られる東洋思想（輪廻転生）を考察する。ALPはHCEの妻であり、シエムとショーン、イッシーの母親であると同時にリフィ川の化身であり、川の水がウィックロウの山中からダブリン湾に注いでいく様が描かれているのは周知のことである。第3部最終章のALPの独白の最後に見られるsonhusbandとdaughterwife (627) に着目し、息子でありながら夫、娘でありながら妻の言葉の意図を探っていく。‘my cold mad feary father (冷たくて狂っていて恐ろしいお父さん)’の元に帰っていくALP (娘のイッシーが同化?)、すなわち海に流れ込む川の流れは、終わりを表す「死」なのではなく、「新生」言い換えると「輪廻転生」を暗示している可能性を示したい。意味深なsonhusbandとdaughterwifeの表現は、魂が転生を繰り返す、正体を失い様々な「我」が入り混じった状態を指すのではないだろうか。

また、「鍵」もこの独白では重要なキーワードである。“How you said how you'd given me the keys of me heart” (626) と描かれ、そしてその「鍵」は最後のシーンで“The keys to. Given!” (628) となりALPは海に同化し、転生のための死を迎える。彼女がHCEから受け取った鍵は何を意味するのか、当時世間を賑わせ、ジョイス自身も大いに関心を持ったエジプトのピラミッドから出土した永遠の命を目指す『死者の書』との関連を探る。

「死」は終わりではなく、永遠への始まりだと考える東洋の思想は西洋の死に対する考え方と大きく異なる。西洋から見た東洋は「エキゾチックな他者」であり、死を恐れない姿勢は未開的で異様であるからこそ魅力的であった。一方、西洋の周縁（西端）に位置するアイルランドは地理的政治的に「西洋の中の東洋」のような存在であった。トリエステ、パリ、チューリッヒと欧州各地を放浪したジョイスが、作品の中で母国をどのように東洋と結び付けて描いたかについて本発表で論じてみたい。

### アナ・リヴィアとジョイスの独白

奥田良二

『フィネガンズ・ウェイク』の最後に置かれているのが、「アナ・リヴィアの独白」であり、この終結部が、大作の締めくくりにふさわしい極めて重要な意味を持っていることは、容易に推測できる。劇に例えると、この部分は「納め口上」であり、俳優の一人が舞台上に登場し、劇に描かれた世界についての説明や弁明、役者や作者の意見や意図を述べる場所である。時には当時の社会問題や将来についての意見や批判を加えることもある。『フィネガンズ・ウェイク』も同じだ。小説の登場人物の一人ALPが、一人で「納め口上」を行い、作品を振り返っている。

だが、ALPの独白を読むと、誰に対して独白しているのかがはっきりしない箇所がいくつかある。また、独白の中で誰のことを言及しているのか、さらには語っているのはALPなのかどうか不明なところがある。特に、何度も使われるyouや、heやhim、weやusなどが、誰のこと言っているのか、そして、IはALPだけなのか、という疑問が残る。ALPは、HCEだけでなく、フィン・マックールや、イギリス（人）、アイルランド（人）、読者、そして作者（ジョイス）らに対して独白し、言及しているのではないだろうか。また、独白しているのは、ALPだけでなく、ジョイス自身でもあるのではないか。「納め口上」の性質から、作者の意見や意図が語られることはあるが、ではジョイスはこの独白のどこで顔を出しているのだろうか。そして何を伝えようとしているのか。これらの点について明らかにしていく。

語り手や語られる相手が変わると、読む視点も変わる。視点を変えて読んでみると、解釈の可能性が膨らみ、このエピローグの内容のより詳細な解明に近づくことができる。独白に続く作品の冒頭部分のプロローグとの繋がりを考慮しながら、いくつかの視点からこの独白を読み解いていきたい。

---

## 5. 第33回研究大会日程とプログラム

---

日時：2021年6月12日（土曜日）10:00 – 17:30

開催方法：オンライン

10:00 – 受付

10:30 – 10:40 開会の辞

会長挨拶 会長 吉川 信

研究発表 10:40 -11:10 質疑応答 11:10-11:25

発表者：南谷奉良

発表題目：ジョイスと〈鞭打つ者〉 —*A Portrait of the Artist as a Young Man*における痛みの詩学

11:30 – 12:10 総会

12:10 – 13:10 昼休み

13:10 – 15:10 シンポジウム1：音楽、ラジオ、オーディエンス—ジョイスのサウンドスケープ  
パネリスト：横内一雄（兼司会）、永嶋友、今関裕太

15:10 – 15:20 休憩

15:20 – 17:20 シンポジウム2： *Finnegans Wake* (1939) IV pp.619.21-628

「アナ・リヴィアの独白」を読む

パネリスト：山田久美子（司会）、奥田良二、下川理英、宮原駿

17:20 閉会の辞

※尚、懇親会については、コロナ感染の現状を踏まえ、今回も開催しない

---

## 6. 日本学術会議会員任命拒否事件

---

昨年10月に起きた菅義偉首相による日本学術会議会員任命拒否事件にかかわって、本協会として抗議声明をHPに掲載しました（現在も継続中）。掲載に当たっては少なからぬジョイス協会会員の方々から熱い賛同のご意見を頂きました。その中から、承諾を頂いたものを以下に紹介させていただきます：

ジェイムズ・ジョイスは、多様な文化、宗教、思想信条、言語、地域、ジェンダー、学問分野、芸術、市民生活等々、諸分野にリスペクトを持って関心を持ち、そのうえで相対化し、人間活動の全包的な認識を言語化しようとした作家と考えられます。このような作家と作品を研究する者は、そのような作家の視点やあり方に学び、研究するものであり、絶えず、ひとつの考えにとらわれる愚を犯しかける自らを戒めつつ、きわめて多様・多方面の研究者たちと共に歩んでいます。その生き方は、ジョイス研究を通じて、自他の尊厳の尊重と自

由と共存を追求することによって、人類を未来に向かって解放して前進させようとするものであります。

このような観点から、このたびの日本の首相による、日本学術会議という、国民をより良い未来に導く代表者、一時の政治状況を超える叡智があると推挙された人々に対する反応は、とどまって、ぜひとも考え直してもらいたいものに見えます。

まず、首相と周辺判断の狭さを危惧し、次には、そのような短絡的な判断で「国」を方向づけ、「国民を支配」しようとする人（びと）の思い違いにわびしくなり、「権力」をほしいままにできるし自分（たち）のみが正しいと考えてしまっておられることに恐ろしさを覚えました。

そして、なかでも、「日本学術会議会員任命拒否についてイタリア学会による声明」を読み、このように道理を首相と周辺にわかってもらいたい、と切に願っていました。私も、マルティン・ニーメラーのように、なりたくありません。「遅すぎた」というようには。

私も、日本ジェイムズ・ジョイス協会の「日本学術会議任命除外への抗議声明」にあるように、「6名の速やかな任命を求め」、かつ、「任命除外に至った経緯と観点の説明」、民主国家の首相としての責任が、果たされるよう、強く、要望します。

（一日本ジェイムズ・ジョイス協会会員より）

---

## 7. 会費のお振込みについて

---

会費は、協会の口座へのお振込みをお願いいたします。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振込みの手数料は会員の皆様にご負担いただいております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、下記の振込先となりますのでご注意ください。

一般会員・・・5000円 学生会員・・・3500円

### 1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会  
口座番号（記号）10430  
番号1854541

\*振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。

### 2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会  
銀行名：ゆうちょ銀行  
金融機関コード：9900 店番号：048  
預金種目：普通  
店名：○四八店（ゼロヨンハチ店）  
口座番号：0185454